

田辺・普賢寺谷中世城館跡遺跡群

一、都谷中世城館跡

同志社大学の田辺校地は、京都府綴喜郡田辺町大字多々羅小字都谷一―三に所在する。この小字名を付けた遺跡が、田辺校地の造成直前に発掘調査した戦国時代の城館跡である。

遺跡は、普賢寺谷に面した低丘陵の南側斜面を背にして、東側に土塁をもち、西側に小さい谷を控えた平坦地に立地している。現在の大学南門から西へ約一〇〇米、学内通路がゆるやかに右折する当りの南側に相当する。

ここは、東流して木津川に注ぐ普賢寺川を眼下に納め、水田地帯や、川に沿う街道の往来さえ、手に取るように見える位置に

鈴木重治

ある。西側の谷に添う山路は、多々羅の集

落から大学正門の南西部にその跡をとどめる不動堂へと通じていたが、すでにこの山路はない。雑木林の間を抜ける起伏のある小路で、よくホホジロやメジロのさえずる道であった。つまり、遺跡は山を裏に控えた見晴しのよい斜面にあつて、東側の土塁と西側の谷で守られていて、自然地形をたくみに利用しており、防備に適した立地をもつていた。

発掘調査の結果は、方形区画の外側の一部に堀状の遺構が検出され、戦国時代に大和で生産された瓦質の甕や、信楽で作られた鉢、美濃で焼かれた天目碗などが、中国産の染付の皿を伴つて出土した。精査によ

つて確認した中世の造成面や焼土層の堆積からは、当時の土木技術や、記録にみえる織田信長の足利義昭追討時の焼亡を考えさせた。

ちなみに、義昭を追つて信長の軍勢が通つたという普賢寺谷は、山城から河内へ抜ける裏道の一つであり、本能寺の変の際、堺に居た家康がいち早く駿河へ逃げ返つたのもこの道であつたという。

二、普賢寺殿館跡と堀館跡

土地の人達が、普賢寺の大御堂と呼ぶ観音寺は、デイヴィス記念体育館の脇から大学の西門を出て坂を降りると、右手に静かな佇いを見せている。国宝に指定されている天平時代の十一面観音像が本堂に鎮座している。この寺に保管されている古絵図のうち、掛図に表装されているのが「興福寺別院山城国観心山普賢教法寺四至内之図」であつて、これには、正長元年（一四二七）の紀年銘があり、天文二年に再画されたものという。史料批判のまたれるものである。この絵図に描かれている「新宮社」は、今なお祀られていて、毎年十月十五日に祭



普賢寺谷の古絵図（同志社の田辺校地は、この図の右側に寄って存在する）

礼がおこなわれている。同志社校地内に保存されている下司古墳群の東側の小社がこの新宮社である。

絵図によると、普賢寺川を挟んで南北の丘陵上には、東西に館群が建ち並び、中に堀や土塁があつて、低地の水田中に散在する民家と較べると、それぞれ大きく描かれている。とりわけ大きいのが「普賢寺殿」と脇に書かれている館で、城氏、下司氏、堀氏などの館を挟んで大御堂の東側では、もつとも大きい。さきの新宮社は城氏と下司氏との館の間に小さく描かれている。

田辺校地の造成に先立つ遺跡の分布確認調査では、この絵図も参考としたが、繰り返しておこなった踏査の結果は、絵図に描かれた城館以上の数の遺跡候補地が観察された。つまり、同志社校地内から土塁をめぐらした地点や堀の痕跡を残す地点、遺物の散布を認めた地点などが絵図より多く観察されて、考古学的に検証することが要請された。

試掘調査の結果、室町時代の銅鏡や古瀬戸の壺、中国景德鎮製の染付の破片、刀装

具の一部などを検出した土塁や、墓地、方形区画の整地跡などを次々に確認した。出土した遺物から、中世とりわけ戦国時代の遺跡群が検証されたことになる。現在、田辺校地内の軟式野球場の南側などに保存してある中世の城館跡群がそれである。このうち、主郭に土塁をめぐらし、西側に二段の平坦面を作り出して腰曲輪としている館跡が、位置関係などから絵図の普賢寺殿の館跡に相当するものと考えられた。また、新宮社の東側の小さい谷を挟んだ丘の上の平坦地が、城氏の館であることは、遺存する堀跡や屋敷からも十分にうなずけるものであった。

なお、新宮社の参道を拡張した際、平坦な方形区画の一部分から土師質の皿や天目碗、白磁皿などが出土した。これらも戦国時代の遺物群であり、下司氏の館跡に関係する遺構と遺物の可能性もあるが、地形の保存を優先させたため、将来の課題として残された。

三、普賢寺川対岸の城館跡

普賢寺川を挟んで、同志社田辺校地と相

い対する丘陵上にも城館跡群が分布している。大字三山木に属す南山の城跡は、最近まで水をたたえた堀の一部をよくとどめていた。近くの民家の整地中に、室町時代から安土・桃山時代にかけての土師器や陶器の碗・皿が出土している。

田辺町教育委員会が発掘調査をした口駒ヶ谷遺跡は、かつて一之木戸と呼ばれた普賢寺谷の開口部に近く、室町時代の建築跡が確認された城館遺跡で、都谷中世館跡の対岸に当る。

京都府埋蔵文化財研究センターが発掘調査した遺跡も中世の城館跡である。普賢寺の西側を通る国道24号線のバイパス工事で姿を消した。厚生年金保養センターなどで消滅した遺跡も含めて、普賢寺谷の中世城館跡群は次々に失なわれていく。

それだけに、同志社田辺校地内で保存されている遺跡群の学術上の価値は高い。中世史の舞台が、遺跡という歴史の生き証人として保存緑地とともに息づいている。

(大学校地学術調査委員会調査主任)

同志社校地出土の埋蔵文化財(10)

鈴木 重治

柿右衛門手色絵皿



(江戸時代)
(新島襄旧邸出土)
径20.8 cm

鶯に梅竹文を配したもので、繊細な筆法による染錦で飾られている。いわば多彩色に金彩をあしらった染錦手の装飾は、十七世紀後半から十八世紀にかけてヨーロッパでもはやされたいわゆるオールド・ジャパンに通じるものである。

老梅の幹にみる力強い屈折した曲線と、しなやかな竹のすんなりと延びた曲線の組み合わせを大きく右側に配して、左側にはたわなに実った粟の穂の下に、丸々とした鶯を遊ばせている。長時間土中にあつたために剝落している金彩が、部分的に梅の花や竹の葉に残っていて、赤絵や下絵の呉須の青を引き立てている。

中国の景德鎮産の磁器に代って、伊万里焼の色絵磁器がオランダの東インド会社によってヨーロッパに運ばれ、当時のシノアズリーに答えたが、それらの中に粟鴨図の色絵皿があることが知られている。一羽の鶯を青く画くのがヨーロッパ特有の柿右衛門写しとされており、ドイツのマイセン窯、イギリスのウースター窯やチェルシー窯などで焼成された柿右衛門写しの本歌が、この出土資料によって想いおこされる。

一九八四年の夏から秋にかけて、新島襄旧邸の一部を発掘調査した。校友会館の改築に伴う事前の発掘調査であった。その際に多量に出土した陶磁器のうちの一点が、この柿右衛門手色絵皿である。

見込部の文様、つまり内面の図柄は、栗

(大学校地学術調査委員会調査主任)